



土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

No. 9 1998.8.

目次	見出し / 執筆者	掲載頁
土木史ニュース	はじめての保存・活用型の重要文化財 ドックヤードガーデン（横浜市）	伊東 孝 1
フォーラム	土木史委員会設立のころ	高橋 裕 2
地域のニュース	樺戸集治監水道の水源地遺跡	小林 三樹 3
	「土木を撮る会」について	西山 芳一 3
海外土木史	アメリカにおける文化財の保存について	伊東 孝祐 4
関連学会ニュース	機械記念物の選定と機械技術史への取り組み	久保田稔男 5
	近年の考古学的成果を造園学からレビュー	昌子 住江 5
学会の動き	第18回土木史研究発表会報告	6
	平成10年度土木史フォーラム小委員会構成	6
	「地域資産としての近代土木遺産」シンポジウム	7
	第19回土木史研究発表会開催と論文募集	7
行事案内	国立科学博物館 技術史講座	8
土木史関係図書	土木の絵本シリーズ	8

土木史ニュース

はじめての保存・活用型の重要文化財 ドックヤードガーデン（横浜市）

昨年の10月、文化財保護審議会は、横浜市みなとみらい21地区にある旧横浜船渠（株）第2号船渠を国の重要文化財（重文）に指定するよう答申した。わかりやすくいえば、ランドマークタワーの前にあるドックヤードガーデンが重文に指定されたのである。

ドックは、明治28年（1895）1月着工、丸2年かかって翌年の12月に竣工している。最初期の石造り商船用ドックで、隣の第1号ドック（明治31年）とともに現在では現存最古といわれる。

設計は、明治初期の横浜のインフラ整備に大きく貢献したパーマーと海軍技師恒川柳作の共同設計である。ドックの基本設計は、パーマーがおこなったが、工事開始前の明治26年（1893）2月に死去、このため恒川柳作が、後を引き継いだ。

第2号ドックはひとつずつ解体された1万2000個の石を、前の位置とは少しずらし、長さも21m短くして復元された。それでも長さは104mある。幅27m、深さは10mあり、下から見あげると3階建ての高さに相当する。

壁石の裏側には、ドックの船形にあわせてぐりりと飲食店が並び、地下には駐車場がある。構造的にみれば、かつては地盤に直接支えられていた

ドックが、今日では鉄筋コンクリート構造の骨組みで支えられて、外観保存されている。このように構造システムが旧状とちがひ、現代施設と複合的につくられた構造物が重文に指定されたことに、大きな驚きをおぼえた。

しかし指定理由を知って、多少納得した。国内ではじめての保存・活用型の重文というのである。ランドマークタワーと一体的につくられたドックヤードガーデンは、来訪者の憩いの場・イベントスペースとして利用されている。大都市部で活用を図りながら、土木構造物の保存をおこなった先駆的な事例が評価されたといわれる。その意味では、従来の文化財概念を変えた、ないしは大きく広げた事例なのである。

土木文化財の利活用のあり方は、事例の少ないこともあり、まだ手探りの状態である。今後、いろいろな事例とともに問題点もはっきりしてくるにちがいない。この意味で、今回のドックヤードガーデンの重文指定は、土木構造物のあたらしいあり方を提示していると同時に、文化財行政のひとつの試金石として注目できる。

（日本大学 伊東 孝）

土木史委員会設立のころ



高橋 裕（東京大学名誉教授）

1974年、土木学会に日本土木史研究委員会が誕生した。新しい委員会を設立するには、理事会の賛同を得なければならない。そこで73年11月の理事会に私がその設立趣旨のご説明にあがった。事前に事務局から数人の理事にはお願いしていたこともあり、この理事会で日本土木史研究委員会設立が認められた。しかし、理事会の席上では、この委員会の必要性については、疑問を持つ理事も少なからず居られ、多くの質問が寄せられた。民間からの理事は、学会財政にさらなる負担になることを心配され、大学からの理事は、土木史なる学問の存在と意義に疑問を持たれたようである。しかし、水越達雄および市田洋理事の好意あるサポートによって理事会通過に漕ぎつけた。ちょうど25年前の話で、当時の学会を取り巻く情勢では、土木史への理解は一般に低かったといえる。原案では日本土木史委員会であったが、土木史とは何であるかをまず研究するという段階であるとの意見が強く、日本土木史研究委員会となった。

本委員会設立の直接の動機は、日本土木史編集委員会（1954.6～73.10）が創立50周年記念事業の一環として「日本土木史 - 大正元～昭和15年」（1965.12）を刊行、引き続いて「日本土木史 - 昭和16～40年」（1973.4）を刊行し解散した。筆者はその編集過程で土木史の基礎的研究の必要性を痛感し、青木楠男委員長の全面的協力を得て、理事会に前述の委員会設立を申し出た次第である。

これに先立つ約10年前、筆者は東大助教授時代に土木工学科の講座新設候補に土木史を、教室会議に提案したことがあった。当時は全国的に工学部拡張時代であり、各大学とも工学部の講座増設に熱心であった。東大土木教室でもその論議が行われていた。東大では最上武雄教授が長年、土質力学の発展と体系化に努力してきた実績を根拠に土質力学講座の設立が最優先であった。続いて構造、材料、各種力学、計画などが次々と候補にあがった。筆者は前後の見境も無く、土木史講座を提案したが、きわめて不評であった。助教授の分際で聞いたことも無いような、なんら学界にも実績の無い学問を提案するなど非常識極まりないと

いう顔をされた。わずかに基本的に支持されたのが最上教授であった。土木史はたしかに重要であり、その意義は認めるが、講座を維持する人材はじめ諸準備がなく時期尚早ではないかとのご意見であった。八十島教授も交通計画から後に景観工学を育てるなど新分野の開拓に実績をあげられたように、新鮮な提案にはつねに好意的であったので、趣旨には同意されたが、他の講座候補と比べると重要度は低く優先的には無理だとの意向だったようである。しかし、他の教授の方々が土木史は歴史だから文学部だとか、全く意義を理解して貰えず、一笑に付されたのとは雲泥の相違であった。

そもそも、筆者が土木史に係わったのは、1952年ころであろうか。建築史家の村松貞次郎さんから、「日本土木技術の歴史」を地人書館の日本技術史叢書全10巻の一冊として執筆しませんかと誘われたのに始まる。村松先生はすでにそのシリーズの「日本建築技術の歴史」を執筆中であった。各巻の執筆者はいずれもそれぞれの分野の技術史家として実績もあり、すでに数冊の技術史関係の著作も世に出しておられる方々ばかりであった。筆者は少々ためらったが、村松さんの熱意に負けて引き受けた。その書は酒匂敏次さんと共著で、執筆は筆者のフランス留学への出発直前のあわただしいなかにも少々無理して1958年10月に完成した。校正その他は酒匂さんに一切お任せして、59年早々には出版されるとのことであった。出版されたら留学先へ送って頂くことになっていた。その後、出版の消息はなく、1960年1月帰国したら、筆者が国外だという理由で、編集は全く進んでおらず大変がっかりした。あわてて出版社を急がせ59年の伊勢湾台風などを加えて同年5月出版となった。私の処女出版である。1950年代時点での執筆であるから、高度成長期以前までの土木略史である。村松さんが、何の実績もない私に執筆を依頼されたのが、いまもなお不明である。一度伺ってみようと思っている間、昨年村松さんは急逝された。傷ましい限りである。村松さんなくして私の土木史は無かったであろう。

地域 の ニ ュ ー ス

かばと 樺戸集治監水道の水源地遺跡

北海道月形町の放棄された土堰堤の直上流に、土砂で半ば埋没した煉瓦造の構造物がある。これは樺戸集治監の水道遺跡で、煉瓦の崩壊と埋没による消滅の危機に瀕しているが、このたび月形町により本格的な発掘調査が行われることとなった。

明治政府が「重罪人は全て北海道島へ徒刑」と決定したのは1880（明治13）年である。集治監はこの地に翌1881年から1919（大正8）年まで存在した。集治監は重罪人専用の刑務所だが、ここには秩父事件など自由民権運動関連の国事犯も収容された。囚人は北海道中央道路の開削など開拓に使役された。

収監者数は1000～1500人、最多時2200人であったが、この地は泥炭に覆われた重粘土層で、生活用水の確保に難渋し水源を求めての工事が何度も繰り返された。

今回調査される遺跡には、高さ約6mの排砂門様構造物と、幅3m、奥行き4m、推定高さ4mの取水塔下部構造物がある。前者の保存状態は比較的良好だが、後者は取水塔に除塵か粗濾過の機能を付加しようと工夫したものと推測されるが、水道技術史上に類例を見ない構造物である。

集治監は1919（大正8）年の閉鎖時点で資料も消えたが、唯一、堰堤と取水管の断面図、平面図が法務省矯正研究所矯正資料館（東京都府中市）に保管されていた。しかし現存する煉瓦造り構造物は、描き込まれておらず、施設の建設年代も不明である。

今後の発掘調査によって不明点が解明されることと、河川敷にある構造物であるが何らかの保存措置が待たれている。（北海道大学 小林三樹）



月形農場川に残された土堰堤の排砂門様構造物

「土木を撮る会」について

「土木を撮る会」は、平成9年1月、代表の写真家三沢博昭氏の提案で結成された30名程のグループです。メンバーは、土木遺産や新しい構造物の施工写真から竣工写真までを撮り続けているプロの写真家が半分、研究者（大学教授）・設計者・編集者などプロの土木家？半分で構成されています。

土木写真は、言葉としてもあまり定着していません。しかし会員は、土木の世界における写真価値の高揚、写真のプロと土木のプロの交流、暮らしを支えてきた土木遺産の写真による保存と公表、被写体になりうる土木施設についての情報交換、若い人たちに写真を通じて土木の魅力を伝えること、などを目的として活動していきたいと考えています。

結成してまだ1年半程ですが、今年の4月に銀座のフジフォトサロンで、43点の土木写真によるグループ展を行いました。遺産から施工写真まで国内・海外の土木を、予想をはるかに越えた6000名もの方々（ほとんどが一般の方）に見ていただきました。反響も多く、これほど多くの人たちが土木に興味を持っていることを知り、驚きました。今後も2年に1度の写真展、年に3回程の勉強

強会・見学会を企画しております。

今まで土木は、その公共性とはうらはらに一般市民には隠された部分も多く、また余りに身近すぎる存在ゆえか、写真家の被写体としては、なかなか捉えられませんでした。しかし、そのスケール感、多様なフォルム、土木遺産におけるドラマ性は十分に写欲をそそって余りあります。

（「土木を撮る会」事務局土木写真家西山芳一）



熊本県白水ダム

アメリカにおける文化財の保存について

以前、土木史フォーラム第3号において「アメリカ土木学会より「歴史的土木遺産のランドマーク顕彰プログラム」と題して寄稿いただいた。今号においては、もう少し広い意味での歴史的遺産のアメリカにおける保存状況について記してみたい。

アメリカでは、歴史・考古学・文化的に価値のある又は建築様式・エンジニアリング技術として歴史的に貢献している建物、建築物、場所、土地、地域等の指定、保存援助、保護を目的として文化財に関する法律（National Historic Preservation Act：1966年に制定、以下NHP法と略す）が制定されている。日本で云うところの文化財保護法である。連邦政府機関は、その遺産の価値を減ずるような行為を禁じている。しかし、連邦政府以外のものが所有者である場合、所有者の行為は制限を受けない。

管轄は、内務省の国立公園の関係部門であると共に、連邦政府の独立した機関である歴史的遺産の保存に関する諮問委員会（Advisory Council on Historic Preservation）が全ての連邦政府関連（各省庁および下部機構）の活動・行為の歴史的遺産に対する影響を監督している。

内務省は、文化財保護のプログラムに従い、関係省庁団体等の助言を受けながら以下の活動を行っている。

- ・ 公認歴史的遺産の指名とそれに付随する規則の設定・改訂
- ・ 遺産保存に関わる資金援助、貸付
- ・ 保存技術の促進の援助
- ・ 遺産保存の教育
- ・ 世界遺産の推選と保存促進

指定の手続きは、遺産の所有者の同意を必要としている。また、NHP法制定25周年を記念して、文化財保護に関する大統領賞（President's Historic Preservation Awards）が設けられ、歴史的遺産とその保護活動に対して賞が贈られている。

国指定の歴史的遺産の登録は、少し古いデータではあるが1993（平成5）年1月1日現在、約90万件となっている。うち、60％は地方、30％は州、10％は国家レベルの重要物となっている。土木施設と思われる指定物件は、全体の僅か5％（約45000件）足らずしか指定されておらず、大部分（約657000件）は建築物となっている。

（国土開発技術研究センター 伊東 孝祐）



セントフランシス川橋（アーカンソー州）
St. Francis River Bridge in Arkansas



Interagency Resources Division
National Register of Historic Places

QUICK FACTS



National Register Listings in each State (January 1, 1993)

Distribution by Resource Type
for all National Register Listings

Building	73%
Object	1%
Site	7%
Structure	5%
District	14%



NHP法で指定されている文化財の形式と州別指定数

機械記念物の選定と機械技術史への取り組み

日本機械学会は、1997年6月12日に創立100周年を迎えた。同学会は機械技術史に関する活動に積極的に取り組んでおり、100周年記念事業として、機械分野の歴史的な産業遺産について機械記念物の選定を行い、その内の工作機械については紹介するパンフレットを刊行・配布している。このパンフレットは『機械記念物 - 工作機械編 - 』と題され、日本各地に存在する明治期に使用された工作機械29点を、写真入りで紹介している。鉄道車両の車輪を削り出すための旋盤なども紹介され、土木技術史の観点からも興味深い内容となっている。

こうした成果の背景には、1990年から開始された、全国規模の産業遺産の所在調査が基盤となっており、調査報告書として『日本機械学会特別員 産業記念物調査』（1994年）、『機械記念物調査報告書 企業・大学・工業高等専門学校・研究所・博物館』（1997年）が、詳細なデータベースの一覧を付してまとめられている。収録データの内容を概観すれば、資料の所蔵先データ・社史などの刊行物データ・実際の産業遺産の基本データなど、その総数1万数千件に及ぶデータが収録され、具体的な産業遺産の中には発電施設に関するもの、鉄道に関するもの、鉱業に関するもの、建

設機械に関するもの等、土木技術史に係る資料も数多く含まれている。

こうした調査は平素の研究活動の上に成り立つものであり、学会の「技術と社会」部門内にこれまで、「機械技術史研究分科会」や「産業技術の継承調査研究分科会」、「機械記念物に関する研究会」といった委員会が設けられ、積極的な研究活動がなされている。各研究成果は報告書や講演会等で発表され、1998年3月31日から4日間にわたって開催された昨年度の総会では天野武弘氏（豊川高工）による「歴史を飾った機械技術（たたら製鉄と日本刀）」の基調講演と共に、多くの研究発表がなされた。

土木史研究とも密接に関連する分野であるだけに、両者の学術的な研究交流が将来的に実現されることを期待したい。

なお本稿執筆にあたっては、前田清志先生（玉川大学）の御協力を賜った。記して感謝申し上げます。

連絡先：社団法人 日本機械学会

〒160-0061 東京都新宿区信濃町35番地

信濃町煉瓦館5階

TEL：03-5360-3500（代表）FAX：03-5360-3508

（国立科学博物館 久保田稔男）

近年の考古学的成果を造園学からレビュー

「ランドスケープ研究」（Vol.61 No.3 1998.1発行）日本造園学会（なお同誌は「造園雑誌」を1994年より改題したもの）では、「近年の考古学的成果を造園学からレビューする」と題する特集を載せている。

この特集を編んだ意図について、「『近年の考古学的成果を造園学の視点からレビューする』特集にあたって」（特集企画担当編集委員 藤井英二郎 鈴木誠）では、次のように書かれている。

「（前略）近年の考古学的成果には造園学的に注目すべき点が数多く含まれており、それらの把握とそこに含まれる造園技術の実態の解明や展開の過程を明らかにすることは極めて大きな課題である。このような造園学的検討は、結果的に考古学的発掘の現場に造園学的な視点を導入する契機となり、これまで見過ごされていた事実スポットライトを当てることになる可能性も高い。しかも、考古学的成果のもうひとつの特徴は施工プロセスやその後の推移が探れる点にある。」

以上のような問題意識をもとに、飛鳥・奈良時代前後から江戸時代までの範囲を中心に、そこに含まれる近年の考古学的成果をレビューしながら、

造園技術の特徴や展開の過程を探るとしている。

その具体的な視点は、特に以下の3点に絞られている。

水利技術や地盤造成、石組み技術を含めた

水景工に係わる実態

植生や植栽に係わる事実や技術

建物と造園の空間構成論に係わる事実や技術
また掲載された論文は以下のとおりである。

「飛鳥・奈良時代以前の庭園関連遺構」 本中眞

「飛鳥時代、奈良時代の庭園遺構」 高瀬要一

「平安時代の洲浜」 鈴木久男

「平泉の庭園」 荒本伸介

「中世城館の庭園遺跡」 田中哲雄

「発掘された江戸の庭園」 谷川章雄

特集の問題意識並びに具体的な視点とも土木や土木史に係わるものであり、参考になることと思われる。

連絡先：社団法人 日本造園学会

TEL：03-3402-7386

（本稿の執筆にあたり、工学院大学の石川幹子教授から情報提供をいただいたことを深謝する）

（関東学院大学 昌子住江）

第18回土木史研究発表会報告

去る6月11日(木)と12日(金)の2日間第18回土木史研究発表会が熊本大学工学部(熊本市)にて開催された。発表は3会場で行われ、発表件数64件(この内、査読付19件)で、参加者数は200人を越えた。今回は、特に、熊本セッションを設け、8件の肥後・熊本の土木史に関する発表が行われた。このセッションのみの別刷りも用意され、無料配布された。地域に密着したテーマで一般の市民の参加も自由であったため、70人収容の第一会場は座れない参加者も出るほどの盛況であった。地元紙とはいえ熊本日々新聞にこの規模の学会の案内(8日朝刊)および学会報告(12日朝刊)が掲載されたのは本会が初めてとのことであった。両日ともこの時期には珍しい程の好天に恵まれ活発な論議が交わされた。また、昨年同様、初日の昼食時にはランチョン・ミーティングが開催され、自由な意見交換が行われた。

11日夕方には、大学内の楠会館にて、懇親会が行われ、約70名が参加した。途中、「古代交通研究会会長」木下良先生の熊本の古代の道に関するご研究の一端を拝聴させて頂いた。さらに、土木史研究委員会・委員長が榛澤芳雄先生(日大)から大熊孝先生(新潟大)にバトンタッチされることと、学会事務局の担当幹事が石郷岡猛氏より丸畑明子女士に変更された旨が披露された。さらに、次期開催校候補として関西大学が紹介された。

また、発表会前日(10日)午後には、恒例の見学会が行われた。熊本駅を12時に予定通り出発、交通センター及び熊本県庁にて参加者を乗車

して、高速道路を利用して八代へ。まず、郡築干拓に残る2つの郡築樋門を見学し、続いて鋼トラスの前川橋へ。次は、球磨川沿いに国道219線に入り、まず、JRの球磨川橋梁、深水発電所を見学。途中坂本村の道の駅で休憩。その後、JR肥薩線の球磨川第一橋梁、鎌瀬隧道、宮松隧道を見学し、最後に八代市内のRC橋である昭代橋を見て、熊本へ帰った。参加者は29名で、「熊本にある近代土木遺産の中の一部であるが、熊本に来て場所がわからず、なかなか見ることが難しい遺産を見ることができてとても良かった。」「ピントラスでは数少ない橋梁である、球磨川第一橋梁を見たくて参加したが、予想通り素晴らしかった」等の感想があった。当日は、曇り空で雨にならず、見学会は予定どおり無事終了できた。

さらに、今回の特別企画として、熊本市立博物館・特別展示室で「土木の日熊本実行委員会」と熊本博物館の共催(後援:土木学会土木史研究委員会他)で「肥後・熊本の土木史展」(6月11日(木)~14日(日))が開催された。展示は、(1)江戸期までの熊本(加藤清正の土木事業、肥後の眼鏡橋)、(2)近代の熊本(熊本の近代化土木遺産、三角西港、高田雪太郎遺品)、(3)熊本今昔(白川の河川史、NTT、港湾、JR、測量機器)の3部に分けられ熊本の土木史が概観できるものであった。期間の後半は雨にもかかわらず、見学者の合計は500人を越えた。

本年度の発表会が盛大かつ無事に終了できたことについて、多くの関係者ならびに参加者諸氏のご協力に対し感謝の意を表します。

(熊本大学 小林一郎・山尾敏孝)

平成10年度土木史フォーラム小委員会構成

委員長

中 村 良 夫(京都大学大学院)

幹事長

五十畑 弘(日本鋼管)

常任委員

伊 東 孝 祐(国土開発技術研究センター)

小野田 滋(鉄道総合技術研究所)

久保田 稔 男(国立科学博物館)

小 山 茂(日本大学)

昌 子 住 江(関東学院大学)

月 岡 康 一(川崎重工業)

長 野 正 孝(武蔵工業大学)

藤 井 郁 夫(東京鐵骨橋梁)

藤 井 三樹夫(水環境研究所)

地域委員

安 達 實(真柄建設)

井 上 肇(ジャパン・コンサルタンツ)

岡 林 隆 敏(長崎大学)

神 吉 和 夫(神戸大学)

進 藤 義 郎(北海道開発コンサルタント)

清 水 浩志郎(秋田大学)

松 山 正 将(東北工業大学)

盛 岡 通(大阪大学)

宮 本 裕(岩手大学)

門 田 博 知(広島工業大学)

事務局

丸 畑 明 子(土木学会)

学 会 の 動 き

「地域資産としての近代土木遺産」シンポジウム

21世紀の地域づくりにあたっては、地域独自の優れた文化的資産、自然環境を十分に保存・活用していくことが、円熟した高質な社会を形成していく上で欠かせない重要な視点となります。土木史研究委員会では、近代土木遺産全国調査の結果を広く公開するために下記要領にてシンポジウムを開催いたしますので、ふるってご参加下さい。

1. 日時：1998年10月13日（火）10：00～17：00
2. 場所：日本大学会館（東京都千代田区九段南4-8-24JR・地下鉄「市ヶ谷」駅下車3分）
3. 定員：200名 4. 参加費：無料
5. 参加申込方法：土木学会誌綴じ込みの「行事参加申込書」に所定事項を記入するか、もしくは「土木史シンポジウム参加申込」と題記したA4版用紙に参加者氏名・勤務先・住所・電話・FAXを明記し、9月30日（水）までに、下記申込先にFAXにてお申し込み下さい。なお、参加券は用意しておりません。
6. 申込・問合せ先：土木学会事務局研究事業課土木史シンポジウム係（事務局担当：丸畑）TEL 03-3355-3559 / FAX 03-5379-0125
7. プログラム：

10：00～10：20 開会挨拶・シンポジウムのねらい
前土木史研究委員会委員長
榛澤芳雄（日本大学）

10：20～12：00【近代土木遺産の現状認識】
調査・評価

岡山大学環境理工学部教授 馬場俊介
保存・活用

日本大学理工学部教授 伊東 孝

12：00～13：00 昼食・休憩

13：00～16：50【近代土木遺産の保護

・活用事例】

富岩運河・中島閘門

富山県土木部長 白井芳樹

山梨登録文化財群

山梨県教育委員会学術文化財課

加藤正彦

関東水閘門群

日本大学理工学部教授 是永定美

京都・琵琶湖疏水インクライン周辺保全整備

京都市教育委員会文化財係 北田栄造

碓氷峠鉄道施設群

群馬県松井田町教育委員会 萩原豊彦

横浜の近代化遺産を生かした町づくり

東京大学工学部助教授 北沢 猛

16：50～17：00 総括及び閉会挨拶

土木史研究委員会委員長

大熊 孝（新潟大学）

「第19回土木史研究発表会」の開催と論文の募集

1. 期 日：1999年6月10日（木）～11日（金）
2. 会 場：関西大学百周年記念館
（大阪府吹田市山手町3-3-35）
3. 審査用論文募集内容（土木学会会員のみに）：
詳細は土木学会誌9月会告欄参照
（以下スケジュール）
- ・投稿申込締切：1998年9月30日（水）必着
- ・論文原稿締切：1998年11月4日（水）必着
- ・論文の採否：1998年12月下旬
- ・本原稿の作成：

修正付加論文（条件付採用）は1999年1月26日、採用された論文は1999年3月31日。

4. 講演用論文募集内容等（自由投稿論文、非会員も可）：土木学会誌12月号案内予定
- 1) 論文テーマ：自由（時代、対象、範囲等、すべて自由）。
- 2) 論文頁数：12頁以内（1頁2550字、9ポイント・25字×51行×2段組）。
- 3) 使用言語：日本語もしくは英語。
- 4) 講演申込方法：A4判用紙に「第19回土木史研究発表会講演申込」と明記し、題目（副題も可）、発表者名・連名者名・所属会員種別、連絡先・電話番号、和文要旨（200字程度）、過去の発表経緯、セッション分類（別記参照）を記述してFAXまたは郵送にて申込み下さい。講演申込受付後、

執筆要項等を送ります。

- 5) 講演申込締切：1999年1月26日（火）必着
- 6) 論文原稿締切：1999年3月31日（水）消印有効
- 7) 論文掲載料：論文原稿提出時にお支払い下さい。6頁まで：21000円、8頁まで：28000円、10頁まで35000円、12頁まで48000円
- 8) セッション分類：
- （ ）：人物史、技術史、社会・経済史（制度史を含む）、土木史一般（考古、研究方法論等を含む）
- （ ）：教育、測量、施工法、地域・都市、景観、交通（道路、鉄道等）、河川、海岸・港湾、衛生・上下水道、構造物（橋梁、トンネル、ダム等）、防災エネルギー、農業（灌漑等）、その他

5. 注意事項：変更点

- 1) 第1執筆者としての発表は、審査用論文、講演用論文を含めて1編のみとなります。
- 2) 論文書式（ページレイアウト）が大きく変更になります。

6. 送付先および問合せ先：土木学会土木史研究編集小委員会（担当職員：丸畑明子）
〒160-0004 東京都新宿区四谷一丁目無番地、
Tel.03-3355-3559 / FAX.03-5379-0125、
E-Mail：maruhata@civil.or.jp）

国立科学博物館 技術史講座

鉄道と煉瓦 - 鉄道構造物に見る煉瓦のいろいろ -

日時：平成10年10月17日（土）午後2時～4時
 場所：国立科学博物館 本館3F大会議室
 講師：小野田 滋（鉄道総合技術研究所）
 募集：50名
 申込：往復はがき
 「技術史講座 10月17日」
 氏名 住所（返信用にも） 電話番号
 年齢 職業
 をご記入の上、下記宛お申し込み下さい。

9月26日締切（消印有効）。
 申込者多数の際は、抽選で決定します。
 申込・問い合わせ先：
 〒110-8718 東京都台東区上野公園7-20
 国立科学博物館教育部企画課
 TEL.03-5814-9875
 なお、都合により会場等変更される場合がございます。最新の情報は「国立科学博物館ニュース 1998年9月号」をご覧ください。

土 木 史 関 係 図 書

『水とたたかった戦国の武将たち』（既刊）
 『人をたすけ国をつくったお坊さんたち』（既刊）
 『おやとい外国人と呼ばれた人たち』（近日刊）
 『近代土木のパイオニアたち』（未完）

監修 高橋 裕
 画と構成 かこさとし
 文と編集 緒方秀樹
 B4変形版 約30頁
 企画・発行 （財）全国建設研修センター

この〔土木の絵本シリーズ〕は、小学上級生を中心に一般の大人までを対象に作成されている。画とひらがな書きで、驚嘆に値する平明で簡潔でしかも正確・的確な表現であり、ここに描かれた「人たち」として土木についての正確な理解をすることができる。ただ残念なことはこのシリーズは一般には市販されていない。全国の全小学校和主要図書館には全国建設研修センターが無料配布されたとのことであるが、私共個人にも入手し得るようになることが望まれる。

編集後記：土木史フォーラム小委員会では6月より中村良夫先生（京都大学教授）が新委員長に就任され、常任・地域委員も1/3が交替になりました。武部健一前委員長および前委員の方々に深く感謝いたします。今後ともご支援賜りますようお願いいたします。また本号は、新・旧委員の活躍により最近の土木史に係る新しい動きが数多く取り入れられており、幅広い読者層の獲得を目指しております。
 最後に、土木史フォーラムのホームページを右記のURLで再度開設いたしました。どうぞお立ちよりください。

土木学会土木史研究委員会監修
 土木史フォーラム No.9
 発行者 土木史フォーラム小委員会
 代表者 中村 良夫
 事務局 日本大学理工学部 小山茂
 〒274-8501 船橋市習志野台7-24-1
 TEL 0474-69-5219 / FAX 0474-69-2581
 E-mail : koyama@trpt.cst.nihon-u.ac.jp
 URL: <http://www.trpt.cst.nihon-u.ac.jp/PLAN1/NEWSLETTER/newsletter.html>

CONTENTS

- NEWS
 First experience of daily use of important cultural asset “Yokohama Dockyard Garden” (ITOH Takashi)
- FORUM
 Those days when CHSCE was established (TAKAHASHI Yutaka)
- LOCAL NEWS
 Waterworks heritage of Kabato prison in Hokkaido (KOBAYASHI Miki)
 “Photograph lovers’ society for civil engineering works” (NISHIYAMA Yoshikazu)
- OVERSEAS NEWS
 Preservation of engineering heritage in USA (ITOH Kousuke)
- OTHER INSTITUTIONS
 Selection of memorial engineering heritage and historical studies in mechanical engineering (KUBOTA Toshio)
 Review on recent achievement in archaeology from the aspect of landscape gardening (SHOJI Sumie)
- REPORT FROM CHSCE (Committee on Historical Studies in Civil Engineering)
 The 18th Conference of CHSCE at Kumamoto
 Announcement of symposium “Modern civil engineering heritage as local cultural asset”
 Call for paper of 19th conference of CHSCE
- WHAT'S ON
 Lecture on engineering history at National Science Museum
- BOOK GUIDE